

エチオピア西南部農耕民アリの女性たちの生活実践における
「もの」の使用に関する民族誌的研究

平成 22 年入学

参加したフィールドスクール：ナミビア・フィールドスクール

調査地：エチオピア南西部南アリ郡

1、自分の研究テーマについて

キーワード；エチオピア南西部南アリ郡、女性、生活実践、「もの」

アリの人びとは、衣食住をはじめとした生活の場において、地域内の素材をつかってさまざまな「もの」を製作、利用している。それらさまざまな「もの」の中には、エチオピアの伝統的な物質文化として、南オモ県の県都、Jinka 市にある南オモ博物館の展示棚のなかで、人びとの生活の場面から切り離されて陳列されているものがある。近年、都市部からこの地域につながる道路の整備がすすみ、さまざまな「もの」や人が地域外から大量に流入するようになった。1960 年代以降のプロテスタントの普及活動により、酒を飲むこととつくるものが禁止されるようになった。これまで酒をつくって現金収入を得ていた女性たちのなかには、パスタや紅茶、あげパンを調理加工して販売するものも現れてきた。女性たちは、このような現金稼得を目的とする活動において、鉄製のなべ・フォーク・スプーン、プラスチックの皿など外来の「もの」を使用している。酒つくりや酒を飲用する際に、人びとが使用していた在来の「もの」は、使用されることが少なくなっている。

この研究では、女性によってさまざまな「もの」が利用・管理されていることに注目し、彼女たちが生活で使用する「もの」を記載していく上で、その利用を明らかにする。「もの」とそれを使用する女性の活動に注目することで、彼女らがどのような意図のもとに自分たちの生活を主体的に構成しているのかを検討する。外来の「もの」が大量に流入してくる生活のなかで、女性たちによる「もの」の利用と管理を多面的にとらえて研究対象とすることによって、女性の生活実践がいかに変容しつつあるのかを描き出すことをめざす。



写真1 土器でお酒造りを行う農耕民アリの女性



写真2 あげパンを販売する女性



写真3 協働で農作業を行う様子



写真4 南オモ博物館の展示棚に陳列される「もの」

2、フィールドスクールで得られた知見について

今回のフィールドスクールで有意義だった点は以下の2点である。1点目は、自らの調査地域の独自性を再認識できたことである。エチオピアはアフリカ大陸の中で、唯一植民地支配されなかった国である。一方、ナミビアは1990年に南アフリカから独立した比較的若い国である。首

都ウイントフックの白人居住区では、ヨーロッパのような建物が立ち並んでいた。また、白人居住区とアフリカ人居住区が分けられており、植民地支配の影響の大きさを実際に自分の目で見て感じとることができた。私の調査地エチオピアでは、博物館に展示されている土器や農具などの生活用具が現在もなお人びとの生活に息づいているのに対し、牧畜民トップナールの人びとの村を訪れた時、ゴバベププリサーチセンターで展示されていたような在来の「もの」が比較的少ないように感じられた。これらの経験を通して、豊かで独自の物質文化が生活の場面で不可欠なものとして利用されているという自分の調査地域の特性を実感することができた。

2点目は、女性の現金稼得活動において、調査地との共通項を見いだせたことである。私が予備調査で訪れた農耕民アリの女性たちは発芽したトウモロコシを発酵させたお酒、トウモロコシの粉とオオムギを原材料とする飲み物、あげパンの販売などをして現金を得ていた。同様に、アフリカ人居住区カタトゥーラの市場でも、女性たちが発芽したソルガムと砂糖、雑穀を原材料としたお酒や、あげパン、クッキーなどの販売をしていた。この飲み物は地域の人たちにとって栄養ドリンクのような役割を果たし、人びとの生活に欠かせないものであると地域の人たちが教えてくれた。女性の現金稼得活動において、自分の調査地域以外の地域でも共通項を見いだせたことは今後の研究において有意義であったといえる。



写真5 黒人居住区内の市場でパンを売る女性



写真6

ナラの実を炒める牧畜民トップナールの女性

3、フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

報告者の調査地エチオピア南部諸民族州の県都、Jinka 市にある南オモ博物館には、各民族集団の物質文化が展示されており、多くの観光客が国内外から訪れている。今回のフィールドスクールで強く認識した、エチオピア南オモの人びとが現在もなお豊かで独自の文化を有しているという特徴を意識して、今後の研究を進めていきたい。



写真7 南オモリサーチセンター



写真8 南オモリサーチセンターで働く女性